

宮古市の宮町あゆみ公園の仮設住宅にお住まいの方といわて生協組合員ボランティアの皆さん。
写真右端の伊藤カヨさんが、サロン活動の中心的存在。



お互いを思いあう関係をつくる いわて生協ふれあいサロン

いわて生協は2011年6月から沿岸部の仮設住宅での
「ふれあいサロン」を続けています。

震災から3年が経過し、継続して支援に取り組む団体が減り、
行政の関わり方も先行きが見通せない中、
いわて生協の組合員ボランティアは
仮設住宅にお住まいの方と心を通わせ、関わりを深めていました。



いつもの仲間と共に
片道2時間かけて通う

4月2日、朝晩の冷え込みが和ら
いだ春らしい陽気の中、いわて生協
のチャーターしたマイクロバスが2時
間かけて宮古市に入ると、車内は
急に慌ただしくなりました。「じゃ
あ、頑張つてね！」とお互いに声を
掛け合い、それぞれ担当の仮設住
宅の集会所に向かいます。

この日、11人の組合員ボランティア
は3カ所に分かれて「ふれあいサ
ロン」を開催します。盛岡市内か
ら参加した伊藤カヨさんたち4人
が担当するのは、宮町あゆみ公園
仮設集会所での昼食会。いわて生
協こゝぶ委員会が作った「3行レシ
ピ」を見て、一緒に料理も楽しも
うという企画です。予定の1時間
前というのに、この仮設住宅で窓口
となっている木村さん夫妻や、嶋崎
ケイコさんとひ孫の莉音ちゃんなど
7人が待つていてくれました。

狭いキッチンでも
一緒に作るのが楽しい

シートまな板でセロリをカットす
る小学2年生のほのかちゃんに負け
まいと3歳の莉音ちゃんが包丁を手
にする。



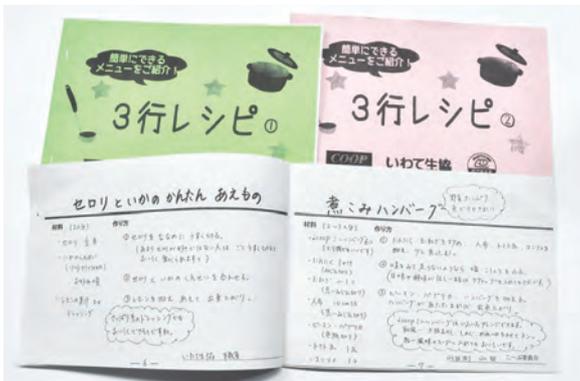
みんなでセロリをカット。中央の莉音ちゃんは翌日から保育園に入園。
サロンに顔を出す機会は少なくなりそうです。

「包丁は危ないつて」
「子どもでもできることつて、なに
かない〜?」
「お皿拭き、お願いしてもいい〜?」

普段は静かな集会所がにぎやか
な声に包まれます。

この日の献立は、「3行レシピ」
第2集から「あさりごはん」「韓国
のわかめスープ」「セロリといかのか
んたんあえもの」「豆腐のなんちゃつ
てあげだし」の4品。事前にご飯
を炊いていたこともあって、30分程
度で出来上がりです。

ふつう、かんたんレシピというと、
時間のない人や普段料理をしない
人向けというイメージですが、「3
行レシピ」は、普段ボランティアに
参加できない組合員により、被災



いわて生協〜ぶが委員会がつくった「3行レシピ」(写真上)。ご飯もの・汁もの・煮物やサラダなどを集め、この日の献立もバランスよく揃えました。

された方たちがもう一度、台所に立つきっかけになればという思いで作られました。

仮設住宅の台所は狭く、慣れ親しんだ家のそれとは比べるべくもありません。思い出すと悲しくなったり、食事をカップめんて済ませてしまったり、お昼はお煎餅だけにしているという話を「ふれあいサロン」に参加したボランティアから聞いていました。いわて生協では、振り返りシートを使って、被災地の理事や支援活動を担当する職員が必要な支援策を定期的に検討しています。「食を大切にして生協として何かできないか」という話し合いから生まれたのが、この「3行レシピ」

と昼食会の活動です。

レシピは「お友だちに配りたい」「若いお母さんにも紹介したい」と好評で、第2集までに5,500部を配布しています。

3年の月日をかけて 関係を築いたからこそ

莉音ちゃんは震災の年の6月生まれで、伊藤さんらと出会ったころは、小さな赤ちゃんだったそうです。この日、莉音ちゃんは、翌日の保育園の入園式を前に、美容院に行ってきたばかり。髪飾りのビーズをつけてもらいはしゃいでいました。

仮設住宅を作った人も、お住まいの方も、3年間をここで暮らすこと

になるとは想像もしていなかったはずですが、子どもの成長には、いやが応でも月日の流れを思い知らされます。この3年で宮町の仮設住宅で子どもがいる家庭はごくわずかになり、ほとんどが高齢者で1人か2人でお住まいです。その

日常を思うと胸が苦しくなるとボランティアの猿舘佳恵さん(さるだてよしえ)は言いました。「ここで見たことがすべてと思わないでほしい。決して大丈夫だなんて言える状況じゃないんです」

この日、手早く調理ができたのは、レシピのおかげだけではありませんでした。受け入れる側の心構えがあつてのことです。「今日だって、皆さん、調理道具持参で来てくれたんです」と伊藤さん。

この日、一番、評判の良かった「セロリといかのかんたんあえもの」はレシピではいかに薫製とあるのを、CO・OPの「こだわりの黄金さきいか」を使用。細かく裂いたことで味がしみ込みつつおいしく感じました。

「明るいとこでみんなで食べるから、なおさらだ」と木村さんが「おいしい」を連発すると、嶋崎さんは「みんなで作ったからおいしい」と言い、木村さんは「次は俺の米でつくろう」と応じます。参加者のそんなやり取りを見て、ボランティアの伊藤さんは「次はみんなで花見をしようね」と提案しました。

宮町あゆみ公園仮設集会所の大きな窓の向こう、閉伊川の支流に沿った遊歩道に並ぶ桜は長い冬を耐え、つばみを膨らませていました。



いわて生協 常務理事 角田信子さん

現場を見て、
できる支援を考えます。

私たちも食事のお手伝いなら
できるのではと、こぶが委員会
でレシピを作ることになりました。
レシピのコメントがうれしいと言
われたので、第2集ではすべての
レシピにコメントを添えました。
第3集では男性も興味を持つよ
うなレシピを盛り込む予定です。
レシピをただ配るのではなく、被災地の方々がどんな抱えているかを現場で見て、できる支援を考へることが大切だと思っています。

先日、コープこづへさんから、
どんな支援が必要かと問い合わせがあり、このレシピ集を束ねる
カバーを作っていただけになり
なりました。全国の支援とつなが
りながら、仮設住宅で暮らす方々の
食が少しでも楽しくなれば、また
新しい展開になると思います。

震災から3年、 広域避難者支援のこれから

4月9日、コープみらいのコーププラザ川越（埼玉県）で、福島県から避難された方を対象に「福玉交流サロン」が開催され、浪江町の復興支援員とコープみらいの組合員により、ちらし寿司や春の根菜を使った汁ものが振る舞われました。この取り組みの事務局である埼玉県労働者福祉協議会の永田信雄事務局長に、避難生活が長期化する避難者への支援について伺いました。

——被災者支援に取り組むことになった経緯を教えてください。

2011年の震災発生直後、さいたまスーパーアリーナに3,000人が避難され、そのボランティアセンターをお手伝いしたことから始まりました。埼玉県内の県営住宅や市営住宅に避難者の方が移られるのに伴い、サロンや交流会をするグループがいくつも立ち上がり、連携する形ができました。県内各地の交流会サロンの活動は、どこに行ってもコープみらいさんと一緒にやっている感じです。

——避難が長期化し、定住するかどうかが迫られているようにもみえます。

そうですね。今までは、避難者が孤立しないよう「つなぐ」ことが一番のテーマだったのが、これからはボランティア然としてではなく、日常の生活の中で自然に寄り添うことがテーマになると思います。

——行政との関係はどうなりますか？

浪江町がすごいなと思うのは、「どこに住んでも浪江町民です。浪江町は心の故郷としてあり続けます」というコンセプトで、避難されている場所で不自由しないよう支援員を配置し、町民の要望を吸い上げている。現実を直視した良い政策だと思います。

——震災から3年、今の状況を予想されましたか？

これだけ被災者が放り出される形で3年間がたつとは思っていませんでした。



サロンであいさつするコープみらい西北ブロックの境 由華さんと神山茂美さん。「これからもこのような取り組みを続けていきたいです」

福島の場合、原発事故だけが注目されますが、津波で家を失った方や、帰宅困難区域、避難指示解除準備区域などいろいろな区分けがあつて、行政の対応も、経済状況や復帰に対する思いも違う。一把一絡げに被災者とか、原発事故から逃れてきたというふうにはならないので、一人ひとりの背景を見ながら関わっていくことが必要だと思います。

——今後はママカフェなど対象を明確にした企画が予定されていますね。

とりわけ子育て世代への支援が重要だと思っています。帰宅困難地域でも自主避難でも、母子で避難されていることが多く、経済的にも大変だし、孤独であつたり不安であつたりが3年たった今でも続いている。そういう人たちに対して、声を掛けて、子育ての相談に乗るし、買い物の手伝いもできるし、一緒に子どもを遊ばせたりとネットワークをつくるような、今の生活を支える方向で考えて

います。

同時に、これからは被災者自身を中心になつて意思決定できるようにして、周囲の人はそのサポートに徹する。そうやって会の運営を一つひとつ変えていく予定です。

——今後、福島県外に住む人ができる支援はなんでしょうか？

一つ言えるのは、首都圏だけでも1万数千人、全国では何万もの人が避難しています。あなたの周りにいる方も、避難されている方もかもしれませんよということ。そのときにゴミの出し方、買物の仕方、ちよつとでもお手伝いができる関係をつくってもらえたらと思います。例えば医者に行くのだから、周りの評判などの地域情報の交換が必要だし、避難されている方が地元と一緒に生活をつくっていく拠点がこうだったサロンだったり、人的に言えば生協の組合員さんということになるのではないかと思います。



埼玉県労働者福祉協議会事務局長 永田信雄さん



40人を超える参加者は福島県からの避難者の方々。浪江町の臨時職員である復興支援員は、そうした方々のお宅を一軒、一軒、訪問し続けています。